

# つんぼいし 聾石

愛知・青山直幹

江戸時代の話である。390年前の慶長十五年(1610年)名古屋城築城のとき、総大将・加藤清正の命令で各地から石を集めなければならない事になった。この工事の手伝いを押し付けられた大名たちが、水野村(今の瀬戸市)あたりからさかんに石材を運び出していた。

ある大名、やはり石を積んで、このあたりまで来たところ、とうとう大八車(だいはちぐるま)から、大石をひとつ取り落としてしまった。

いまさらこれを、また大騒ぎして拾いあげるのも業腹(ごうばら…非常に腹が立つ)とばかり、そのままにして行きかけたが、ふと思いついたことがあり庄屋(村長、名主)を呼び出して言った。

「いいか、おまえたち。もし工事奉行(城譜代)の役員どもが、この石のことを吟味(ぎんみ…念入りに調べて確かめる事)しにくるようなことがあってもおまえたち、なにもしゃべってはならぬぞ。もし、うかつなことを申したら、おまえたちを重い罪にしてやるぞ。」とさんざんおどして立ち去った。

庄屋、この言い訳にあきれてしまったが、まてよ、村のみんなに難儀のかかる(なんぎ…苦しませる)のは、なんとしても防がねばならぬぞと思立ち、さっそく村人を集めると、なにやら一同にごそごそ耳打ちをした。

翌日、はたしてここを通りかかった役人が、すぐ大石に目をつけた。そして、そのあたりにいた村人に、「おい、この石はどうしたのだ」と話しかけたが、この村人、耳を指さして口をパクパク首を横に振るばかりである。

また、向こうからくる村人に、同じことをたずねても、やっぱりその村人、“つんぼ”だという身振りをして口をきかない。

役人はじりじりしながら、こんどは庄屋を呼び出したが、これも身振り手振りで、さっぱりうちがあかない(解決がつかない)。

役人、ほとほとあきれてしまい、ため息まじりで言った。

「さてさて、つんぼの多い村だな。しょうがないわ」

のちになると、この石に【聾石】の名がついてしまった。またそれから、耳病の患者が小石を供えて祈願すれば快癒(かいゆ)するという信仰までできてしまい、昭和初年までは、付近に小石の奉納がみられたようだ。

なんといっても面白くユーモアあふれた、とんち話ではないでしょうか。このように名古屋城築城にまつわる伝説は、他にも県下の各地にあり、その工事がいかに苛酷な労働を強制したかというを伝える内容のものが多く。つんぼ石の由来の真偽はともかくとして、落とした石を拾いもせず、村人の口を封じることで問題を解決しようとした侍の墮落ぶりや、その命令を受けた村人が、すましてとぼけているこっけいさと風刺は愉快ですね。

さて、肝心の「つんぼ石」って本当にあるのでしょうか。まさか…あぐりするかもしれませんが、実在していたのです。なんと尾張旭市にあるのです。名鉄瀬戸線「旭前駅」に下車して徒歩し、瀬戸街道に入ったら、左に折れて行くと追分(分かれ道)がある。左の道は「殿様街道、御成筋(おなりすじ)、定光寺(じょうこうじ)道」、右の道は「瀬戸街道」。その角に「つんぼ石」が堂々と点在していたのです。今は、土地改良のため50m先の住宅地の角に移動してひっそり建っている。

いっぺん訪れてみたらいかがでしょうか。



平成13年撮影

「つんぼ」といえば、今としては「おし」「めくら」と同様に差別用語と扱われ、ほとんどの辞書からも削除されている。が、これはあくまで障害を持つ人に対して軽蔑してはならないとしての配慮である。今回のような「つんぼ石」は、けっしてろう者を侮って使っているのではなく古くから親しまれている史跡の名前である。